

保育内容B 授業実践報告 「表現と伝えあい」を育む保育実践

佐々木貴弘・佐藤万利子・君島 智子
(保育学科)

I. 目的

保育内容Bでは、「表現と伝えあい」を基本テーマとして活動を展開してきた。平成26年度から、「劇あそび」を柱におき、総合表現的活動ともいえる「劇づくり」を通した保育実践をし、主に、授業内では、互いに表現し、伝え合い、遊びを展開していく中で、自らが体験を通して、その意味を理解することを目的として実践してきた。また、令和3年以降は、コロナ禍で学外活動や実交流が制限される中、学内でできる保育実践を想定した表現活動「協働する、共に作り上げることで深化する人間関係」や、その表現活動における製作の過程をも重視した、「表現活動を通して培われる人間関係や協働する心」を目標とし、その中で、実体験から得る「実感」を大切に活動してきた。子どもは、人的環境あるいは物的環境との関わりを通して、日々学び成長するが、保育者養成校に所属する学生もまた、音楽や造形表現を含む保育内容「表現」の中で、同じ目標やねらい、種々の環境と向き合い、共に協力し、試行錯誤を重ね、学び合いを通して、共に創り上げる経験から獲得する「協働性」と、それを育むプロセスの中で、互いに気持ちを通わせる「伝え合い」を体験してきた経緯がある。

さて、例年、柱として実施してきた市民文化センターでの「音楽劇」の公演が、令和5年度も会場の改修工事が継続しており開催できず、引き続き中止となったが、令和5年にコロナが5類に引き下げられたことで、本来

の活動に立ち返り、学び合い、交流を行い、徐々に従来の形の戻しつつ実施した。最後に行った協力園における訪問型の公演で、保育現場における「劇あそび」の成果発表や実践交流の場となった。活動の性質上、実体験を重視した時間を多く設定し、活動に合わせて外部講師を招聘するなど多様で実践的な表現活動に挑んだ。具体的な活動としては、「ボディパーカッション」「素話」「劇あそび」に加え、外部講師による「あそび歌コンサート」に参加、鑑賞するなど、個々人の表現から、グループ活動で取り組む活動を通して「表現と伝え合い」について問い、授業を展開した。

II. 活動内容

保育内容Bでは「1. 素話を学ぶ: 演じる」「2. 多様な表現を体験する: ボディパーカッション、劇あそび他」「3. うたあそびコンサートへ参加で実感・体感」「4. 豊かな感性と表現: 劇あそびを演じ、子どもに参加を促す指導法の模索」の4つの柱を基盤として授業を展開した。授業では、冒頭のオリエンテーションにて、5領域との関わりを示す関係資料「保育内容「領域」の総合化」による説明からスタートし、学生自ら実践を通してそれぞれの体験がもたらす5領域の学びや、それらが総合化されていることを具体的なプログラムの体験から学ぶことができるよう構成した。

1. 言葉による表現: 素話を学ぶ

小学校教育において示されている「言語能

力の確実な育成」「伝統や文化に関する教育の充実」「国語教育との連携を図り日本語の特徴や言語の豊かさに気付く指導の充実」に、つながるものとして、令和5年度も「素話」の表現を通して「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」を目指す時間を設けた。保育内容Bでは「聞く力・話す力」を中心としたコミュニケーション力の向上をめざし、素話を覚えて語る授業を実践してきた。この実践を通して、学生の「聞く力・話す力」の養成には、段階を踏むことが重要であり、素話を学び、語る実践は、保育者を志す学生にコミュニケーション能力育成の効果があると示唆してきた。民話を、長年語り継いできた語り部を講師として招聘し、実演して頂き、その世界観を語り部から直にお聴きするという大変貴重な時間となった。更には、いくつか紹介して頂いた民話に、学生自身が挑戦し実際に、語り部体験した。

2. 多様な表現の体験：ボディパーカッション

令和5年度の保育内容Bでは、自らの身体で音を出し表現するボディパーカッションの視聴及び実践を通し、乳幼児の人間関係の育ちにどのように影響するかについて、学びを深めた。まずはボディパーカッションの動画を視聴し、視聴後は、グループごとに、ルパン三世の音楽に合わせて、次週の発表のための練習を行い、2回目に発表を実施した。

3. 伝統楽器による表現：太鼓で遊ぼう

日本の伝統的な楽器「和楽器」の中には、和太鼓、和琴、笛、三味線などがあり、その一つである和太鼓に挑戦した。本物の和太鼓に触れ、実際に皆で「力と心」を合わせて演奏を行った。今回は、保育現場で実際に幼稚園児が行っている和太鼓演奏を鑑賞した後、同じ演目に取り組んだ。

4. 豊かな感性と表現：子どもとあそび実技研修会に参加して体験的に学ぶ

令和5年度も、保育内容Bでは、全国各地の保育者養成校、県内外の保育現場、子育て支援施設、児童館などを巡り、親子や現職保育者と交流活動をしてきたあべコロッケ氏を招聘し、本学和室にて、「子どもとあそび実技研修会」を開催した。氏は、前職にて、「あきらちゃん&コロッケくん」のコンビで、年間200か所以上のあそびうたファミリーコンサートや保育士研修会講師の他、それらの企画制作も行っており、現在、仙台市内で保育園の園長をされている。

5. 豊かな表現：音楽劇の実践を通して

例年は豊かな表現を学ぶために、イズミティ21“たのしいおやとこのファミリーコンサート”で音楽劇として子ども達の前で演じていた。今年度は、幼稚園での保育実践を計画し実施し予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、保育実践と最後の発表を行うことができなかったため、「友達欲しいなおおかみくん」を題材として練習に取り組んだ。劇あそびでは、子どもたちを劇あそびに巻き込んで楽しい活動にすることを目的として、下記の3つの目標を設定した。

【劇あそびのねらい】

- ① 物語を理解して表現する
- ② 劇中の登場人物や動物の感情に共感して、言葉で表現する
- ③ 仲間と話し合い協働しながら劇を作り上げることができる

Ⅲ. 活動成果

1. 言葉による表現：素話を学ぶ

素話は道具を一切使わず、相手の目を見ながら言葉による表現で物語の世界を立ち上げる語りであるため、語り手自身が、その物語の世界観を楽しみ、息づかせていくことが欠かせない。学生が5グループに分かれ、それぞれが選んだ素話を練習し、物語をお互いに

披露し合い、語り部体験を行った。その後、グループ代表者を1人選出し、講師や学生たちの前でその語りを披露したが、どの学生の語りも、自分たちなりにそれぞれの世界観が描けるような語り口になっていた。また、学生達はこの体験を通して、語りの奥深さに魅せられ、今後の保育の現場でも、この経験を活用したいとも話しており、言葉や語りがもつ表現活動について深く考える機会になったのではないかと感じている。

2. 多様な表現の体験：ボディパーカッション

ボディパーカッションの実践では、学生たちは自分の体を叩いたり、足踏みをしたりして出る音の楽しさを感じていた。また、音楽に合わせ、グループごとにフォーメーションをどうするか、活発に意見を出し合う姿が見られ、このような活動を通して、共同性が高まり、人間関係が形成されていることにも気づいたようであった。その後、ステージ上での練習を行い、学生たちはただ表現することだけではなく、表現したものを見せることを意識しながら主体的に取り組んでいた。グループ発表の場面では、自分たちの演技に集中する姿はもちろんであるが、他のグループ発表を熱心の聞き入る姿も見られた。

3. 伝統楽器による表現：太鼓で遊ぼう

〈園児による和太鼓演奏の視聴と和太鼓を演奏した学生の感想【鑑賞】【表現】〉

◆【鑑賞】1人だけでなく仲間と共に和太鼓をすることで息を合わせることが大切だと気づいた。心を1つにして叩くことや声を上げる時にはハッキリと大きな声で伝えることで周りにも伝わりやすくなると感じた。子どもでも息を合わせて自分より大きな太鼓を叩いてる姿を見て圧倒された。【表現】グループで音を揃えたり、最後の掛け声を揃えることで仲間と演奏することの楽しさや躍動感を感じることができた。自分だけが上手に叩けれ

ばいいというだけでなく、全体としてどのようにすればいい演奏ができるかといったことを考えたり、困難を感じている仲間をフォローすることで協働性を感じた。チーム演奏をする楽しさをこの授業で味わえた。

◆【鑑賞】1人では完成出来ない。周りとのコミュニケーションをとり行うことが大切だと思った。【表現】分からないことを共有して理解することでひとつの音楽になることを学び、コミュニケーションの大切さを感じた。

◆【鑑賞】同じタイミングで音を出すので、合わせる心が必要だと思った【表現】伝え合うことによって、太鼓の音色があっていったさらに良くなると感じた

◆【鑑賞】みんなで一丸となって太鼓で演奏する中で周りの音と合わせることが必要だと感じた。息を合わせて演奏することの大切さを学んだ。【表現】音を合わせたり、掛け声を合わせることが大切になることを感じた

◆【鑑賞】上と下のパートで分かれて太鼓を叩く時に、途中でどちらかのパートの音が途切れた場合でも、もう片方のパートが支え合うことで音が途切れずに最後まで叩くことができるのだと視聴を通して学ぶことができた。【表現】太鼓を叩いている時や途中の声掛けの時に、周りの人を見て音を合わせながら太鼓を叩くことで綺麗な音を響かせることができるのだと実践を通して感じた。

4. 豊かな感性と表現：子どもとあそび実技研修会に参加して体験的に学ぶ

子どもとあそび実技研修会では、これまで授業内で行ってきたいいくつかの表現活動を更に発展させるため、打ち合わせ時から、参加型の実技研修会を従来通りに行う方向で企画した。また、和室にて、基本的にはマスク着用や手指消毒を行った上で実施し、目まぐるしく続く演目の数々。「じゃんけんから、その勝ち負けで立場や役割が変わるゲーム」「役

割交代をして、相手や他者の気持ちを理解するあそび」手遊び、集団遊びなど、日常の保育現場で行われているやり取りや言葉の掛け合い、集団遊び、お互いの発表を見て思いを共感するなど、参加し実体験することによって得られる保育の楽しさを体全体で実感することができた。また、あべコロッケ氏から園長として、これから現場に出る将来の保育者に対して期待する事として「子どもに活動を楽しんでもらうためには、まずは保育者自身を楽しむこと」と、パフォーマンスに加え、その根本的な向き合う姿勢についてもアドバイスを頂いた。また、昨今の保育現場における個々のニュースを取り上げながら、危ないもの（こと）を、ただ避けるのではなく、道具であれば、その使用法やルールなどをしっかり子どもに伝え、理解してもらう事が大切であること、更に『「あそび」には動的・静的なものがあり、「人間」にも動的・静的の二面性があり、ひとつの「あそび」を通して、学生同士がそれぞれの立場・関係性において動的・静的な性質を時々刻々と流動的に変化させ、入り交えつつ、保育者としての子どもへの係わり方を実体験して欲しい』。その目標を受け、体験的に学ぶ研修となった。

〈実技研修会に参加しての感想〉

◆ペアで行ったりグループになって行う場面が多く、仲間と共に身体表現をする楽しさを味わった。1人だけでなく仲間と共に行うことで楽しさや喜びを共感することができた。また、動物の鳴き声を伝える場面で自分なりのイメージを持ち表現する楽しさや他の友達の鳴き声を聞いて豊かな感性を持っていることを感じた。

◆演じる側が楽しむことで、自然と周りも楽しくなること、仲間と一緒に身体表現をする楽しさを感じる事ができた。

◆子どもの目線になった時お互いに伝え合

う難しさや、ルールの説明等を伝える難しさを感じた。

◆みんなで助け合いながら協力して演奏することの素晴らしさと達成感を得た。

◆ペアになって取り組む身体表現遊びや皆で取り組む身体表現遊びなどがあり、子どもになったつもりで楽しく身体表現遊びをすることができた。講師の方のお話しや歌に合わせて仲間と一緒に目線を合わせながら楽しく身体表現遊びをすることで一体感がうまれた。

公演後、「今年の学生の皆さんも、大変イキイキしていました。実習を終えている学生ということで反応がよく、発信にも受信にもありました。互いの期待感をそれぞれが共感することを通して作用していたのは、子どもにおいてもなおのこと。将来、保育者となる皆さんにエールをお贈りいたします」という総評と激励のメッセージを頂く。学生らの中にあるやる気スイッチを押して頂き、表現者・伝承者としての氏が、引き出してくれた。

実技研修会の開始から終りまで、「表現と伝えあい。共感するところ（保育内容Bのテーマ）」について、実績と豊富な経験を基に、保育技術のみならず、その視点からのアドバイスも含め、伝授して頂く形となり、参加型の実技研修会を実施して、改めて「対面でしか伝わらない、実体験の大切さ」「表現し伝え合い、共に学びあい、互いに深まり培われる共感性」を実感した。

5. 豊かな表現：音楽劇の実践を通して

「劇あそび」は音楽の流れにそって物語が展開していく遊びで、総合的な表現活動といわれている。豊かな感性と創造性がからみ合ってできる活動であり、素話や絵本等から劇遊びへ移行していく。共通のイメージを持ち、繰り返し読むことが大切で、自分の言葉で声に出すことにより登場人物に自然と一体となる。この一体感が劇遊びには不可欠であ

り、そのものになりきるからこそ、演じる楽しみが生まれることを学生は実感した。

幼児教育における音楽劇のもつ表現の意味について、神原（2013）は「表現活動は、幼児の心身の成長や発達において重要な役割を担っている。幼児期においては音楽活動そのものに楽しいという感情を抱けるようにすることがポイントである¹⁾」と述べている。このように、音楽劇は幼稚園教育要領及び保育所保育指針「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域を網羅し、遊びを通して行われる総合的な音楽表現活動といえる。

また、保育者養成における音楽劇の体験は、伊藤（2010）が「幼児の音楽表現を伸長させていくには、様々な形で表れる幼児のひたむきな表現の芽に柔軟に対応できる音楽性、そして何よりも保育者自身の豊かな感性が求められる²⁾」と述べているように、保育者の質の涵養にも大きな役割を果たしていることが分かる。さらに、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」にある「豊かな感性と表現」を育てるために、音楽劇がどのような役割を持つのか、実践することで自らが感じた主体性について考える機会となった。

6. アンケートにみる劇あそびの学び

劇あそびに取り組む中で、各グループでねらいを設定し、それを踏まえた上で年齢の発達に即した保育を考えて、劇あそびの練習に取り組みました。劇あそびについてどのようなことを学んだのか、学生の学びをアンケートから分析する。

◆みんなで1つのものを作り上げる協調性が大切だと改めて感じた。また、見てくれる人が楽しんでもくれるように自分たちも楽しい表情をしたり手振りを大きくしたりなど工夫をすることで劇の良さが会場のみんなに伝わると感じた。

◆練習でどんな劇にしていくなか考える際に意

見を伝えたり、こうしたいという気持ちを伝えることの大切さを感じたのでこれからは子どもたちが楽しく劇を行えるように学んだことを生かし配慮していきたいと思う。

◆子どもたちが「うさぎさんだ！」や「オオカミかっこいい！」など声をかけてくれるところから子どもの無邪気さや素直さを感じることができた。子どもに分かりやすく伝えるために少し大袈裟に表情や手振りをするので見ている子どもは場面を理解しやすいと感じた。子どもは感じたことを素直に伝えてくれるので、その分「かっこよかった！」「面白かった！」などの言葉を聞くことが出来てとても嬉しかった。子どもが楽しめる保育を子どもの姿を見ながら自分たちも楽しみつつ取り組んでいきたいと思う。

◆子どもが劇を見ながら眩いていたたり、笑っている姿を見たり、感想の時に、「かっこよかった！」と言ってくれた姿を見て、大きな振りをしたり、一生懸命歌う姿が子どもたちに伝わったのだと感じ、劇遊びを通して子どもと大学生が繋がることのできるのだと学んだ。

◆この約2ヶ月、みんなで意見を出しながら、一人ひとりが忙しい中も、頑張って練習してきて作品を届けることができてよかった。この経験を、これから現場に出た際にも活かし、子どもの思いを、1番に大切にすることを忘れずにいたいと思う。

◆みんなで協力してひとつのものを作り上げていく協調性、そして自分の表現力を上げていきたいと思った。また、自分の課題を見つけることができた。

IV. 今後の課題

保育内容Bでは、表現や伝えあいを学生たちが体験できるように授業展開を考え、授業実践してきたが、劇あそび、素話、ボディパー

カッションを主とした総合表現活動を通して、学生間のディスカッション、演じる側と演じたものを見る側の経験をし、これらの活動を活かし表現活動の指導法を模索した。

その中で、保育内容「表現（造形、音楽）・人間関係」を中心に探求してきたが、改めて、「遊び」が保育内容の5領域の総合化によって形作られていることを、実体験を通して理解し、その遊びや教育環境の中で学び合う表現活動が、将来の子どもと関わる上で大きな役割を担っていくことを確認した。ダンス、素話、劇あそび等から、改めて、表現と伝え合いによる広がりを通して、種々の表現を通した「遊び」を、保育現場で主体的に発展させる技術の獲得を目指したが、多様な表現方法によって伝え合い発展していく可能性を、今後の保育を行う上で確かな手ごたえとして自分の実感してもらいたいと願っている。

平成30年4月から施行された新たな幼稚園教育要領（文部科学省、幼稚園教育要領）では、現代的な諸問題を踏まえ教育内容の見直しを行い、小学校教育との円滑な接続を目指す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）を明確に示しているが、これらは、幼児期におけるいわゆる非認知的能力を育むことの重要性の指摘等を踏まえたものといえる。その中で、10の姿のひとつである「言葉による伝え合い」には、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」と示さ

れている。

「ボディパーカッション」、「素話」、「太鼓を使った表現」、「劇あそび」については、4月からの保育現場における保育の内容や活動に活かす学びとして、多様な表現活動を体験した。汐見捻幸は「子ども・保育・人間」（2018）の中で、「人の心の中には「共感したい」という思いが強く存在しています。だから人は、ものごとを共感的に見ることができたとき、自分がもっているエネルギーを「共感する」という形で発揮できたときに、「幸せ」をかんじられるのではないか³⁾」と記している。その中でも特に、子どもと共に作り上げる劇あそびの活動など、将来の発表会などを想定した保育内容指導法について、それぞれが実践に向けた学びの展開をこれからも発展させてもらいたいと感じている。また、表現活動の中で「共に気持ちを伝え合い、心を通わせ創り上げた体験」を大切に、卒業後も現場にて、子どもの表現力を育むための関わり方や指導方法を模索し、各々の実践に向けた礎となれればと考えている。

VI. 文献

- 神原雅之・鈴木恵津子. (2013). 『幼児のための音楽教育』. 教育芸術社.
- 伊藤仁美. (2010). 「保育者に求められる音楽表現力の育成に関する一考察」. こども教育宝仙大学紀要. 9-15.
- 汐見捻幸. (2018). 『こども・保育・人間』.